

五 工業國の恐怖

(最近商政經濟論 第二篇
ルヨ・ブレンタノ著論文邦譯)

工業國の恐怖

ルヨブレンタノ著

我獨逸國民は刻下一の大なる不安心に襲はる。吾人の眼を向くる限り、獨逸國民の現在と將來とに關して、盛に討論する集會を見ざるところなし。而して如此集會に集り來る者は、彼の演説を以て常業となし、又は演説會に行くを日常の事となす種類の人士のみならず、平常は自己頭上の利害の外、殆んど考ふる處なき人々に至るまで、其慣來りたる麥酒店を去て、其實極めて乾燥にして、平日にあつては専門家の注意を惹くに止まるのみなる問題を討論せんと、雲霞の如く立錫の地なき演説堂へと集り來るのみならず、白眼他の世上の人を見る底の學者達も、其の書齋を辭し、其書卷を擲つて、慣はぬながら政治上の討論に加はる。我祖國の將來繋りて此の一事にある重要な問題を決す可き秋に方りて、民衆の正に向ふ可き正路を示さんと國を思ふの念より出づるなり。誠に然り、我獨逸國民

は、今や之れを、小にしては其の人民各自、之れを大にしては國民全體が一の政治的團體として、の幸不幸、一に繋げて此れに存する所の、重大なる問題を處決す可き時機に際會せるなり。

思ふに獨逸の國民經濟は、最近數十年來其の組織に於いて、根本的の變化を經つゝあり、三十年以來獨逸の經濟生活に起り來れる變動は實に多端多様なりき。然れども其の凡てに勝る一の重要事あり、何ぞや。他なし、獨逸國は其の生存の始めより、輒近に至るまで主として農業國たるを脱せざりき。然るに最近三十年來、此の形勢は變じて、今や獨逸國は日ましに、主として工業國たるの地位に變じつゝあること之なり。然り而して、斯くの如き變化は必ず此れに伴ふに困難なる内部の紛争の存するあるを免れざるは、云ふまでもなき處にして、各種の經濟的産業に従事する、多くの社會階級間の政治上の權力重要に大なる異動の生じ來ること、亦如何ともするに由なし。新しき階級の迅速なる生長によりて、比較的後方に追ひやらるゝ運命に遭遇せる一社會階級が其の權力其勢力を秋毫も失はざらんと全力を傾けて防禦の計に出づるは當然なり。のみならず、彼等が正直に且

つ主觀的に確信して、己等の比較的勢力を減殺せんとする時勢の發展を目して、祖國の將來を危くするものなりとして、其競争者の前進に對し、最大の悲觀を抱き最惡の結果を豫測するが如き、蓋し人情の常と云ふの外なかる可きなり。之れに反し、他方には其の競争の相手になる人々が、此等人士の主張する自然的發展を抑制し、自己の競争者の進撃を防ぐ可しとの要求は、自己の力の開展を妨ぐるものなりとして奮起するもの亦故なきにあらず。此くして一大論争は起り、双方とも激甚なる勢を以つて、之れが憤闘に従事するに至れるなり。

予は此敵味方の何れにも、個人上私淑する所全然之れなし。予は過去生涯の大部分を通じて工業階級の階級的利益が國民全體の共同の利益と背馳するものあるときは、極力之れに反對するを辭せざりき。今日と雖も猶如此場合には予は其の敵たるなり。他方に於いて予は農業階級の特殊的利益を國民全體の共同利益の上に立たしむ可しとの論にも賛同する能はざるものなり。

予は今此の全體の共同利益の立場より考察して、次の諸點に關し卑見を披瀝せんとす

るものなり。

- 一、既に起り而して絶へず起りつゝある此の變動の真相如何
- 二、此變動は如何にして起りしや
- 三、世人が目して此變動に伴隨せりとする處の危険は如何なるものなりや
- 四、多くの人が主張するが如く若し獨逸國を再び農業立國時代に退化せしむる時其結果は如何なる可きや

而して此等の説明をなすに方りては予に反對の見を持つる人士の發表せる一定の論説を相手とする必要あり。若し予にして爾かせざらんか、風に向て拳を擧ぐるの謗は到底之れを辭するを得ざる可ければなり。然れども此くするに方り利害關係の當事者の群中に身を授ぜんことは、誰も予に望まざる所なる可し。故に茲に同學たる伯林のアドルフウグナー教授の反對論を立論の的とするは此の卓越なる經濟學者に對し予が敬意を表し其拔群の學力並に其主張する學說より正に出づ可き正當の論結を躊躇せずして下し且公言するの赤誠と勇氣とを尊重するの餘に出ることを世人の諒せんことを深く

望まざる能はず。

第一章

既に起り又現に進行しつゝある變動とは、職業上より見たる獨逸國民の分賦の變動是れなり。獨逸職業統計は之れを明示す。今農業に生活する獨逸全人口を以て、商工業に生活する獨逸全人口と比較するときは其百分率左の如し。

	千八百八十二年調査	千八百九十五年調査
農業人口	四八・二九	四一・三七
商工業人口	五一・七一	五八・六三

既に千八百八十二年に於いて、農商工の三主要産業に屬する有業者中、農業に屬するものは其半に及ばざりき。千八百九十五年に至りては、更に其勢を助長して、農業人口の割合は百に付僅かに四一に過ぎず而して其以後に就て見れば獨逸人口の全體の増加の割

合は七七八なりき。主として工業に従事する地方にありては、其増加は百分の一八主として農業に従事する地方にては僅かに百分の五の増加に過ぎざるのみならず地方によりては人口却て減少せる處あり。されば今日職業統計を取るあらば恐らく商工業に生活する人口の割合は、全人口の六割以上に出で農業人口は四割以下に下るなる可し。

然りと雖も、單に此職業統計のみによりて、以て獨逸帝國の經濟上の重點は農民並に地方人口に存せずと結論するは速斷に過ぎたるものなり。此統計的數字は、如此結論に到達す可き幾多の準據點中の一たるに過ぎず。一國に於る最重要産業の何なるかを定めんには、更に如何なる産業が其盛衰によりて他産業の盛衰を支配するかと問ふを要す。昔時にありては此は則ち疑もなく農業なりき。俗諺に曰く、農民の富む即ち國の富むなりと。今日と雖も獨逸國中此諺の適中する地方あり。則ち北ババリア地方小都會の如き之れなり。商人あは彼の風景に富めるストラウピングの市街に杖を曳かんか、商店にて販ぐ處のものは、悉く之れ近在農民の需要に應ぜんが爲のものゝみなるを見ん。されば此等農民の懐具合良き時は、ストラウピングの商工業者も其收入亦多し。さればこそ北

ババリア地方は猶純然たる農業地方たるの域を脱せずと云ふなり。

乍去全獨逸に就て之れを云へば、如此は除外例に屬す。我獨逸の工業は地方的市場の爲めに生産に従事すること極めて稀なり。其近在地方には一人の買手だも見出さざる可も產品の生産に従事する工場は、吾人の屢々見る所なり。是等工場は全國に對し、遠隔なる都會の顧客の爲めに生産に従事するのみならず、又外國市場の需要に應ぜんがために生産するものにして、而も其の割合は日々に増進す。されば今日の狀態は昔日と反對にして、工業の利潤多き時國民大多數の需要に應ずる農業工業の產品に對する購買力亦増進する時なり。換言すれば、諸産業の盛衰は、主として工業の盛衰によりて支配せらるゝものなり。多くの地方殊に南獨逸地方に於ては工業の繁盛と共に、地方に新都會起り其の結果として、今迄貧しかりし地方が未だ嘗て見ざる富裕を極むるに至る事例を見ること尠しとせず。此他猶獨逸國が主として工業國に移轉するの證左と見る可きもの多々あり。即ち今日農業より得る所の各人の所得は、之れを商工業より得る所得に比較する時は遙に少額なり。大藏大臣フォン・ミケル氏が普魯西國々會に公示せる統計によれ

ば千八百九十年、千九百年の所得税歳入豫算中、法人所得は千九百年に於て合計五五、六〇七、九八四麻克あり。中五億五千萬麻克は疑もなく、商工業より出る所得なりと言ふ。更らに個人所得に就て之を見るに左の如きものあり。

所得税納税義務者の數 免稅者並に其家族を包含す

都會にありては 六、六七六、三〇七人
 地方にありては 五、九〇三、四〇九人

あり。然るに

千九百年の全人口中

甲 所得税を納めざるもの	都會		地方	
	總數	百分比	總數	百分比
八、三一、二二四人	五七・九八	一四、〇六六、〇九〇人	七三・五一	
乙 所得税を納むるもの	都會		地方	
九〇〇—三〇〇〇 麻克	總數	百分比	總數	百分比
	四、九八五、一〇二人	三四・七八	四、七〇六、六三〇	二四・六〇

二 三〇〇〇—六〇〇〇	六四〇、八〇二	四・四七	二六八、九七一	一・四一
三 六〇〇〇—九五〇〇	一九〇、五六七	一・三三	四九、六七六	〇・二六
四 九五〇〇—三〇五〇〇	一六六、二五六	一・一六	三四、四五〇	〇・一八
五 三〇五〇〇—一〇〇〇〇〇	三四、二五二	〇・二四	七、一三〇	〇・〇四
六 一〇〇〇〇〇以上	七、〇八〇	〇・〇五	一、五九八	〇・〇一
合計	六、〇二四、〇五九	四二・〇二	五、〇六八、四五五	二六・四九
甲乙合計	一四、三三五、二七三	一〇〇・〇〇	一九、一三四、五五五	一〇〇・〇〇
都會の分	五、四八九、三一九、八三〇麻克			
地方の分	二、三五一、九七三、〇三五同			

其納税所得高合計七、八四一、二九二、八六五麻克にして、其中

なり。

右の中三千麻克以上の所得額あるものを其所得の種類に就て分てば左の如し。

- 一 資本財産 一、一四一、一四〇、五二三麻克
- 二 土地財産 九二一、三八二、四四三
- 三 商工業並鐵山業 一、四一八、四〇七、三〇八

四 「一般の營利事業

九六三、七五二、七二一

最近九ヶ年間の所得税統計の重要な數字を比較するときは、左の如し。

(表略)

三千麻克以上の所得ある納税者の、土地所有より得る所得高の合計九二一、三八二、四四三麻克中より都市の土地所有より生ずる高即ち五億四千萬麻克を控除する時は農業より生ずる所得の全所得額に於ける比例は、農業人口の普國全人口に對する比例よりも更に小なり。茲に遺憾に堪へざることは、ババリア國には如此農業所得と他の所得と比較をなすに足る可き統計の存せざる事之れなり、然れどもザクゼン王國には之れあり。同國にては千八百七十九年より千八百九十二年に至る間に於て、所得額に左の如き變化起れるを見るなり。

都 會	千八百七十九年	千八百九十二年
五四五、九六五、一五九麻克	一、〇四〇、一二六、二八五麻克	
村 落	四九九、〇一八、一二三同	六七二、八七〇、九〇九同

換言すれば都市に於ては所得額百分の九〇五増をし、村落に於ては増加の百分比三四八に過ぎず。而して同期間に於ける納税資格者數の増加は、都市に於て百分の五七八にして、村落にては僅かに一五四に止まれり。ザクゼン統計雜誌 三十九卷五二一頁

千八百九十二年ザクゼン國の人口六千以上の都市に於ける所得額は八九四、三二八、四四〇麻克にして、千八百九十八年には一、一五八、四三一、〇四二麻克なり。茲に猶ほ附言す可きは、ザクゼン國經濟上の状態に於いては、村落に於ける所得中、猶ほ農業によらず、工業より出るもの甚だ多きこと是なり。千八百九十九年の所得豫算によれば、ザクゼン國全人口の全所得額は二、二八七、六八四、二三三麻克にして、其内三一八、〇五〇、五二七麻克は、土地所有より出づるもの、而も其大部分は都市に於ける土地より生ずるものなり。同國統計 年鑑一九〇一年 五〇九頁

次にウルテンベルヒ王國に關しては、八十年代の始めに於る現ゲハイムライトフオン・ンテールの計算によれば、全所得額七億二百十萬麻克あり、其内譯左の如し、ヒ國誌二ノ九第三卷八頁

五 工業國の恐怖

二三三

	百萬	百分比
甲 原料の生産	二八〇、四	三九・九四
一 農業	二四三、五	三四・六八
イ、穀作、牧畜	二二四、〇	
ロ、葡萄耕作	一三、〇	
ハ、果樹植付	一〇、〇	
ニ、菜圃	六、五	
二 林業	二九、〇	四・一三
三 鐵山業、トルフ探掘	七、九	一・一三
乙 原料精製並商業	三二三、〇	四六・〇〇
一 商工業	三〇〇、〇	
二 交通業	二三、〇	
丙 雇役	七二、七	一〇・三六
丁 外國よりの利子收入	二六、〇	三・七〇

然り而して右統計以後に於て、全所得額著しく増加せるのみならず其相互の比例即ち

商工業の比例の増進したることは、一の疑の容る可きなし。

右に同じく、商工業よりの所得の農業所得に比して著しく多きことは、バーデン國の所得税豫算之れを示す。即ち千八百九十四年に於ける所得調定額左の如し。

法 人	九、四〇八、八三一麻克
農業者（所謂混合營業者をも含む）	八〇、一一九、四五〇
工業者、官吏其他	一四九、一四一、九三九

以上各種の統計は獨逸帝國の重要聯邦諸國に於て、農業より生ずる所得額は其他の産業より來る所得に比して遙に少なきことを明示して餘りありと云ふ可し。

一國課税の重點は、其時其國の國民經濟の重點を形成する産業に求めざる可からずとの正當なる見解に基き、我獨逸國にては、近來其收税の源を主として商工業に求むる傾向あり、商工業租税の負擔は日に増し重加して行く勢を成せるは當然の事理と云ふ可し。されば獨逸帝國の大部分に於ては、地租は國税として全然廢止せられ、然らざる所にては、猶増税は地租以外の他の税源に求むるを例とするに至れり。

五 工業國の恐怖

二三三

例ば普國にては千八百九十三年七月十四日の法律を以て地租建物税及工業税は國税としては全く廢止せられ、代ふるに所得税並に之が補充たる財産税を以てするに至れり。千九百年普國所得税の收入豫算は都市に於ては實に一九五四三、九三二麻克に及べり。然るに村落に於ては其金額三八八五二、八四〇麻克に過ぎず。而して納税者一人の納税額平均は調定所得額百に付、

都	會	二・一八
殊に市部に於て		二・二九
地方		一・六五

の割合を示せり。今之れを金額に徴するときは、人口一人に付都會に於ては八麻克三四殊に市部に於ては一麻克一一、地方にありては僅かに二麻克〇三に過ぎず。又補充財産税の額は都會合計二一、八二〇、二六一麻克、地方一二、三〇三、一三一麻克なり。

ババリア國にては、最近時に至り收穫税を漸次所得税に近き形に變更しつゝあり。而して農業の國家財政に於ける比較的重要の度益々減少することは、次の數字最も明白に

之れを示す。

直接國税總體の中に就て

地	租	自一八二〇 至一八三〇	自一八三七 至一八三八	一八七九	一八九五
家	屋	七二・〇	六九・五九	五一・七六	三六・九六
工	業	五・〇	八・〇四	一五・〇〇	一八・八四
資	本	八・九	一一・五〇	一八・〇〇	二一・七九
利	子		五・二四	九・三四	一四・四五
所	得	税*	五・六三	五・六五	七・九六

×千八百四十九年前迄はドミニカル税と稱す

※四十八年前は家屋税、五十五年迄は一般所得税其以後は勞働所得税なり

今此地租收入中、國家が農業の爲に費す諸補助費(尤も彼のなみだ金を除て)を控除するときは、千八百九十五年に於て、ババリア國直税總收入中、各税の收入額百分比左の如し。

地租 二九・二五 家屋税 二一・二五 營業税 二四・五〇 資本利子税 一六・五〇 所得税 八・五〇
 ザクゼン國にては、千八百九十八年所得税總收入二九、九〇七、五二五麻克なる中、二一、三三三

八、二七四は實に人口六千以上の諸都會より來れるものとす。ウルテンベルヒ國にては、全人口中百分の四二・九一は商工業によりて生活し、百分の四五・〇九は農業に従事す。然るに此少數の商工業の方、多數の農民に比し其納稅總額國稅并に地方稅共遙に多額なり。同國統計要報千八百九十八年七月二十六日

バーデン國に於ても亦同じ。千八百九十四年の所得稅總計によれば、

法	納稅額
農民(混浴營業も含む)	二四四、五七〇麻克
工業家、官吏其他	一、九六五、〇一九
	三、八七六、七四一

なりき、

バーデン國にては、不動産よりの所得は、都市の土地をも算入して、全所得額の三分の一に出でず、更に此額を個人勞役よりの所得に比する時は、約千萬麻克少し。蓋し所得稅收入額の大部分は、人口四千以上の市町より生ずるものにして、農民より來るものは僅かに

一、小部分を成すに過ぎず。プレントノ論文 集四八三頁参照
以上列擧する處を要言すれば、

管に職業統計のみならず又實に各產業者間相互の關係並に所得分賦の實勢は吾人に示すに今日獨逸國民經濟の重點は、最早農民并に地方人民に存せず、而して我財政制度は、既に早く之れを看破して組立てられあることを以てす。さればこそ、獨逸帝國の今日、主として工業國なることは如何なる詭辯家と雖も、之れに疑を容るゝこと能はざるなり。然り而して此不可疑事實こそ、之に對する各種の苦情と、農業立國の舊時へ復古せしめんと、の要求を生ずるに至りたる原因にてあるなり。

第二章

然らば次に答ふ可き問題は、獨逸帝國が如此主たる農業國より主たる工業國に變化せんとする大勢は何等の原因に胚胎するや是れなり。

答曰此變化は所謂土地收穫遞減法則の結果に外ならざるなり。蓋し一定の面積の土地より限りなき多量の收穫を得る能はざることは實に自明の理なるのみならず、收穫増加の最終限に到達する前既に土地に對して勞働並に資本を累進的多量に用ひざる可からざる一事に徴しても、收穫の増加は相對的には減少するものなることを明示するものを知る可し。即ち收穫の高は絶對的には之を増加し得可しと雖も、此絶對的の増加は一に皆比較的餘分の費用を費して後始て見るを得べきものなり。其結果は人口の愈々増加するや、其營養に充つ可き食料品は之を産するに益々多分の費用を要するを免るゝ能はず、元より收穫遞減法則は農業上の技術の進歩によりて其作用を一時停止せられ得るや、疑を容れず、又技術の進歩は收穫を管に絶對的のみならず、又比較的に即ち其之を得るが爲に要する費用に比較して、増進せしむるとあり。然れ共如此技術上の進歩を招致する爲には、一定の前提條件の存するを必要とす。然るに此條件は必ずしも常に又何處にも伴するものに非ず。従つて技術的進歩なるものは唯僅に限られたる度に於て起り得。又其起る處にても猶其費用を減少する作用は、人口の増加に伴ふて免る可からざる農業

上の生産要具の最重要要件たる土地の價の騰貴てふ現象に依て、よし全く相殺せられ了らずとも著しく影響せられ、又は掣肘せらるゝものあるを免れざるなり。加之、一度一の技術の進歩起り了るとき、收穫遞減の法則は再び其作用を始む可く、勞働資本を土地に費せば費す程其餘分の收穫は比較的減額の實を呈す可し。而して一定の面積より收穫し得る穀物の數量には、最終の限界なるもの存す。されば一國の人口増殖し、従つて耕作し得可き土地の全面積を耕作せざる可からざるに至れば、其全人口の營養に必要な食料品は益々多額の費を糜して、僅かに之を得可きのみと知る可し。

反之工業にありては、全然正反對の法則支配せり。工業の主たる生産要具は不絶増殖し得可き資本なり。此生産具は其生産額何程増加するも、常に當初の生産に要したると同一の費用を以て獲るを得可きものにして、従て其結果たる生産品も亦同一の法則に支配さるゝなり。第一番目に作出する紡績器械は、第二番目の器械よりも、更に廉價を以て生産し得。何となれば工業に在りては大仕掛の生産は小仕掛の生産より、其生産費比較的に小額にて事足ればなり。而して之れが生産に資本を掛くる多ければ多き程、紡績器

械一個の價は廉價となる可し。従て各鍾の費用亦益々減じ其結果は益々廉價に紡績糸を賣捌き得るに至る可し。此くの如く工業品の生産に必要な生産費は農業に於けると反對に其生産に使用する資本の高増加すればする程減少するものなり。

由此觀之農業と工業と其生産の上に於て重大なる差違の存在するものあるを見る可し。農業的生産の最要具は土地なり。此の土地の存在する量は限りありて常に益々高價に赴くの傾を有す。而して人力の得て及ばざる取除の場合の外は餘分の收穫を得るには益々多額の費用を必要とす。

然るに工業的生産の最重生産要具は増殖し得可き資本なり。此資本なるものは均一の價、否多々益々より、少き費用を以て之れを穫るを得るものにして、勞働と資本とを費すこと多ければ多き程其收穫の比例亦増進するなり。

さればこそ一國の經濟組織農業的なればなる程其養ひ得可き人口數少く其反對に工業國の人口は農業國に比し頗る稠密なるを得るなり。更に又生産費を控除せる剩餘の増殖換言すれば生産より成る富の増殖が農業地方に於ては工業地方に於けるに比して、

遙に遅々たる所以も亦之を理解すること容易なる可し。同一の理由により人口増殖の度速にして其營養を國內に求めざる可からざる必要は日に益し、巨大の生産費を要する諸國は必然の勢として漸次農業國より轉じて工業國に移らざるを得ず。之によりて國內の自然的生産要具の恩恵の減少を、他の遙に豊饒なる天然の賜たる產品の輸入によつて相殺するを得るなり。國內耕地收穫力の制限は、工業に用ゆる増殖し得可き資本の無制限の收穫力の作用によりて撤去せらるゝを得、遠隔の國々の遙に豊饒なる土地の收穫物を我工業製品に換へて將來するによつて此困難を免るゝを得るなり。

是れ即ち獨逸國の現状なり。獨逸帝國の現面積の人口數は

千八百十六年 二四、八八三、三九六

千八百五十五年 三六、一一三、六四四

千九百年 五六、三四五、〇一四

即ち十九世紀に於て其増殖の割合は平均百に付〇九八なりき。此増加比例は近年に至り著しく昂進せり。即ち千八百八十五年より千八百九十年間には百分の一〇七千八百

九十一年より千八百九十五年間には百分の一・二、千八百九十五年より千九百年間には百分の一・五〇の一ヶ年平均増加比例を示せり。

然るに此の如く増殖し行く人口の住居せる土地の面積は殆んど増減する所なく約五千四百萬ヘクタール一ヘクタールは凡そ我一町に止れり。而して千八百八十三年、九十三年、千九百年に於ける其の配分の状左の如し。

	一八八三年	一八九三年	一九〇〇年
一 耕地菜園	二六、一七七、三五 <small>ヘクタール</small> 一	二六、二四三、二一四	二六、二五七、六九六、五
二 草 原	五、九〇三、五〇一、一	五、九一五、七六九、一	五、九六五、一一七、五
三 牧 場	三、四二五、一四六	二、八七三、〇三六、六	二、七〇六、七一〇、五
四 葡 萄 畑	一三四、六一八	一三二、五七七、五	一三五、二一〇
五 山 林	一三、九〇八、三九八	一三、九五六、八二七、三	一三、九九五、五一三、四
六 家屋敷地	四四七、八一二、六	四八四、三二六、九	五二一、七七五、六
七 不 毛 地	一、六一六、一一九	※二、〇六〇、五六六、六	二、一〇二、五二二、一
八 道路水路等	二、四一二、三三六	二、三八二、三一七、三	二、三八九、二〇八

※此中『小量の牧地』を含む

此統計に依て見るときは各項の土地面積殆んど異動なし。殊に三、七、八の諸項に訂正を加ふる時然り。更に又之れによりて學ぶ處は第一項の耕地並に菜園に充用せられたる面積の擴張によりては日に増進して行く穀物需要を充すに必要な丈の地産穀物増加は到底得て望む能はざること之れなり。謂ふに缺點なき關稅率論の主唱者の要求する處は、實に獨逸國が其穀物の需要の全量のみならず更に凡ての農業上林業上の産物を内國に於て生産せんこと之れなり。然るに實際我邦の生産する處は、凡ての農業上林業上の産物に於て、雜草と糖菜とを除ては其消費高よりも遙に少し。而して此雜草と糖菜との耕作せらるゝ面積は比較的甚だ僅少なり。然り然らば耕作地の擴張に用るを得るものは獨り前掲第七項『小量の牧地』並に不毛地なる一項を剩すのみ。而して假りに此一項を技術上悉く耕作地に變じ得可しとするも、猶農業並に林業の全方面に於ける不足を除去するに足らざるや明なり。

人口の増加と之れが營養に充つ可き地積の限りあることの二事情は、地價を驅て益々

騰貴せしむるあるのみ。マイツエンの説に據れば、普國の土地並に農業上と銀量並にライ麥の價を基として計算するときは、シュレジエン州に於ける地價の割合左の如し。

年	一フーフエに付 ターレル
自一六三八至一六四九年	八一
自一六五〇至一六七五	一五一
自一六七六至一六九九	二四八
自一七〇〇至一七三九	四六四
自一七四〇至一七六九	三七三
自一七七〇至一八〇五	七二三
自一八〇六至一八一九	九五五
自一八二〇至一八三九	一六七二
自一八四〇至一八六〇	三〇〇六

即ち千八百〇六年より千八百六十年の間に於て地價は其の三倍に騰貴せるなり、ウオーカー（經濟原論第二はホルスタインに於ける或大所有田の一例を擧ぐ。即ち其賣買價は卷百八十頁）

年	ターレル	百分比例
一八一九年	二八、〇〇〇	一〇〇・〇
一八五二年	八〇、〇〇〇	二八五・五
一八五六	一一四、〇〇〇	四〇七・一
一八六二年	一七〇、〇〇〇	六〇七・一
一八六三年	二〇六、〇〇〇	七三五・七
一八七一年	二八五、〇〇〇	一、〇一七・八
一八七七年	二四〇、〇〇〇	七六四・二（公賣價）

なりしと云ふ。

ハレ區裁判所管轄區内にては、土田（リッタルグ）の賣値左の如くなりき。

年	一ヘクタールに付 麻克
自一八〇一至一八二〇年	七三六・五一
自一八八一至一八九五年	二、五四四、四八

十九世紀の始めに方り四百八十八麻克〇七なりし田地一ヘクタールの價二八八一年よ

り一八九八年の間に於ては三千四百六十七麻克三二に騰貴せり、コンラツド年五月分八百五十四頁、
 パバリア王國ラウフェン區裁判所の報告によれば、ブレンタノ農政ペツチツングに於ける土地賣買價は、一八四四年、一八九〇年の間に於て三倍せりと云ふ。

コルマンの説に據れば、千八百六十六年より九十三年に至る間の、オルデンブ
 千八百五十年前 千八百六十九年より千八百九十
 一ヘクタールの價 三年の間に於ける騰貴百分比例

マルシユ 一、五三八、三 七〇・二九

オルデンブルグゲースト 五〇〇、四 九七・四二

ミュンスタージェースト 三四四、九 九六・九九

公爵國 八三〇、六 七九・七二

メクレンブルグ大公爵國に於ける地價並に小作料騰貴調査書によれば、一フリーフェの平均賣買價如左

自一八二〇至一八二九年 四三、五〇〇 麻克

自一八六〇至一八六四年 一八四、八〇〇

自一八六五至一八六九 一七四、九〇〇
 自一八七〇至一八七四 一五二、五〇〇
 自一八七五至一八七八 一六三、五〇〇

即ち一八二〇年より六十四年に至る間は不絶騰貴し、其以後は下落の傾向を有す、是れ利子率の騰貴より來る現象り。

以上に掲げたと大同小異なる地價の騰貴は、獨逸帝國何れの地方にも起れり。予が既に『自由貿易の學說論』に於て論じたる如く、最も多量に穀物を獨逸國に輸出する露國諸縣に於ては、一デスエーチネに付地價平均

ウフア縣 一四、〇三^ル、^{ブル}、^{フル}
 オレンブルグ 一五、〇八
 テレク地方 二六、〇三

にして、ベサラビヤ地方にては一〇七留二三、クルスク地方にては一三一留七六の高價を示す。

米國にては千八百九十一年の官府總計によれば、穀物を輸出する諸州にて八十年代に一エーカー、ダゴタに於ける五弗八十九仙より、イリノア州に於ける三十一弗八十七仙に至る。

之れを獨貨に換算する時は、露國にては一ヘクタールの價二十八麻克より、二百四十麻克の間に於て、米國にては一ヘクタール、ダゴタにて七十二麻克より、イリノア州の三百八十四麻克に及ぶ。

之れに反し我獨逸國にては、千八百八十六年四月廿六日の普國移民法は、一ヘクタール五百六十麻克の賣價を標準として取れり。然るに實際如何と察するときは、千八百九十九年の終迄は、一ヘクタールの實際賣買價は平均六百六十二麻克の高きに及ぶ、即ち

一八九六年	麻克	六四八
一八九七年		七六六
一八九八年		八二四

なりき。

ババリア王國にては、二十四の模範地方に於ける農業状態の調査によれば、不良田一ヘクタールの賣買價は九百麻克平均なりき。獨逸西部にては、地價の高きこと遙かに此上にあり。

然らば、獨逸國耕地の收穫の狀況如何。

今之れを主要穀類に就て研究せんに、今日迄國民一般の營養に最も必要なりしものはライ麥とす、其耕作面積は全穀物耕作面積の四割に及び、耕地及び菜圃全面積の百分の二二・九三に及ぶ。其之れより多きは、北獨逸並に南獨逸にありては、北プファルツ地方あるのみ、即ち百分の二二・九六なり、而して一ヘクタールの一千八百七十八年以來の收穫高は天候如何により非常なる増減あり、舊式推算法によれば、千八百七十八年より七十九年に至る間には、一ヘクタールに付一・一七噸の平均收穫ありき。一八七九年、一八九二年の間にては之れよりも少く、一八九二年より九三年に至る間は、多くの場合に於て其上に出でたり。新式推算法 即ち舊式推算法に比し一ヘクタールの實收に依れば、自一九〇〇年至一九〇一年の收穫高は一・四三噸なる可しと云ふ。

彼の世人の揚言するが如く、海外諸國の競争の起りて以來にあらす、遠く千八百五十二年即ち獨逸帝國全面積の人口僅かに三千五百八十萬、其當時の關稅區域の人口總數二千九百七十萬に充たざりし時に於て、已に既に獨逸國內のライ麥生産額は國內の需要を充すに不足なりしなり。而して千八百五十二年以降獨逸關稅區域のライ麥の輸入超過起れり。然り而して普國に於て千八百五十一年より千八百六十年の間に平均百六十五、四麻克なりしライ麥の價、千八百七十一年より七十五年に至る間に百七十九、二麻克に騰貴せりと雖も、猶其不足額を國內の生産を以て供給し得る程其生産の増加を誘致するに至らざりき。

千八百七十四年即ち獨逸關稅同盟區域の人口數四千七十萬に増加せし時のライ麥輸入超過額實に七八〇、〇〇〇噸に及び、人口四千四百萬に達せる千八百七十九年に於ては又實に一、三二四、〇〇〇噸に昇れり。然るに其以後は人口増加の勢は益々進むにも拘らず、輸入超過の高は此數に達せざるのみならず却て減少せり。是決して國內ライ麥生産額の増加せし爲にあらす、ライ麥耕作面積は毫も増加せず、又一ヘクタールの收穫高も決

して増加せず、最も良き場合にても其増加高は誠に僅々たるものなりしなり。此輸入減少の眞因は實に需要の變動より起れるものなり。即ち一方に於ては小麥價の下落は其消費額を増加し、他方には馬鈴薯の消費増加せる結果のみ。

ライ麥に次で、獨逸國民の重要食糧は小麥なり。近年其價の下落と共に其消費高は増進せり、少なくとも人口一人に付消費し得可き小麥の量は増加せり。小麥耕作の地積はライ麥地積の三分の一に充たず、然れども千八百七十八年以來其増加せること二〇〇、〇〇〇ヘクタールに及ぶ。千八百九十三年の耕地統計によれば、獨逸國の全耕地並菜に圃に對する小麥耕作地の割合は百分の七、七二なりき。之より多き割合を示すは南獨逸ライン沿岸中央獨逸ヘルデスハイム、ブラウンシュヴァイヒ、ミン等なり、千八百七十八年以後一ヘクタールの收穫高は、天候によりて異動あるとライ麥に同じ。即ち舊式推算法に従ひ、一八七八年より七九年には一ヘクタールに付一、四四噸、千八百九十年より九十一年迄は（千八百八十七年より八十八年に至る間を除て）此れより少く、九十年代に至りて舊式推算法に據て、一六七噸、新式推算法によりて、一八四噸に増加せり。近頃に至り舊式推

算法は百分の十二丈け實收穫より少く計算せることを發見せりと云ふ。千九百年——九百〇一年間には新式推算法によれば其收穫高一、八七噸なりと云ふ。

千八百七十二年迄は獨逸國は小麥を輸出せること輸入せるより多し、千八百七十三年並に七十四年は獨逸の小麥輸入が輸出より多かりし始めての年なり。其時の人口數七十三年には四千百三十萬、七十四年には四千百七十萬なりき。次で千八百七十五年再び輸出超過を見る。千八百七十六年以後は——其時の關稅同盟人口數四千二百六十萬——千二百九七、〇〇〇噸の輸入超過あり。千九百年に至りて——其年の人口數五千六百三十萬——輸入超過額一、〇六三、一八七噸即ち全消費高の四十五分の十に昇れり。之に依て見れば穀物の國際的競争が小麥價を下落せしめたる以前即ち小麥價最も高かりし時即ち一噸の價二三五、二麻克なりし時に於て、已に既に獨逸の小麥生産高は其消費高を掩ふに足らざりしなり。小麥耕作地積の増加し一ヘクタールの收穫高の増進せるにも拘らず、過ぐる二十五年間に於ける人口の増加は千八百七十三年、七十四年に於けるに勝りて、生産消費不調和の大勢を助長せり。

次に大麥に就て之れを見んか其需要は常に食穀としてのみに止まらず、主として麥酒原料のマルツ及び其他のものに用ひらる。而して最も肝要とする點は其收穫の時期之れなり。溫帶中の寒國にありては、大麥の收穫は七月の終りより八月の初めにあり、亞極帶地方にては八月の終りに至る。埃太利、匈利國より獨逸國に輸入する大麥の、獨逸自産に比して遙かに勝る所以のものは、其收穫期の早きにより、麥酒醸造所に早く賣り込むを得るが爲なり。何となれば醸造所は大麥の買入れ一日の早きを争へばなり。獨逸産大麥の半以上は醸造用に用ひらる、又ブランドー製造所にも多額の使用あり。牛豚羊鳥等には大麥は種々の形にて飼料として用ゐる最も適當なる糧穀なり。

獨逸帝國に於ける大麥耕作面積は千八百七十八年以來大體に於て増減なく、千八百九十三年の耕作統計によれば獨逸耕地菜圃全體に對する大麥耕地の割合は、百に對する六、二〇なり。之れより多きは、南獨逸並にチュリンゲン諸國あるのみ。又其收穫高も天候の異動より來る自然的異動を除きて、之れを見るときは増減せるところなし。僅かに九十年代に至り、一ヘクタールの收穫高の少しく増進せるあるを見るのみ。新式推算法に

よれば、千九百年に於ける一ヘクタールの平均收穫高は一八〇噸なりき。

千八百五十五年、千八百六十七年並に六十八年の三年を除ては、獨逸國への大麥輸入超過は、千八百七十年より始まると云ふて可なり。即ち國際農業大競争の未だ始まらざる以前なり。千八百七十年には關稅同盟區域の全人口三千八百八十萬あり。而して輸入超過の高は四五、〇〇〇噸なりき。此れより以後絶へず増進し、人口五千六百三十萬に達せる千九百年に至ては一、〇六四、三二九噸に及べり、フォンシェールの計算によれば、千八百九十八年——九十九年に於て、獨逸の大麥の全需要高の百分の三二、七は、外國輸入を以て之れに充つと云ふ。終りに、ワート麥に就て見んに、ワート麥は人類の食料に用ゐらるゝ甚だ僅少にして、其主なる用は馬匹の飼料に充つるにあり。ワート麥の獨逸國に於ける耕作面積は、ライ麥に次いで最大の割合を占め、千八百七十八年以來、約三十萬ヘクタール増加せり。其耕作地は獨逸國中殆んど何れにも普し、一ヘクタールの收穫は少なからず増進せり、新式推算法によれば、千九百年には一、七二噸なりき。

此收穫増進の原因は、主として種子の改良より來り、ワート麥の耕作には、殊に有効なる

耕作法の周到綿密なるに至れるの結果にはあらず。

千八百七十一年までは、千八百六十四年並に七十年を除て、獨逸國よりワート麥を輸出せること輸入せるより多し、千八百七十二年（即ち同じく國際穀物大競争以前）以來、ワート麥の輸入超過始まる然れども、其額は最近數十年間穀物輸入超過額中最も少なきものなりき。

以上列擧せる所を約言せんか、獨逸國の人口數は、千八百十六年に於いて二千四百八十八萬なりしもの、千九百年に於て五千六百三十萬に昇れり。反之此二倍以上に増殖せる人口の食料を生産するに充つ可き土地の面積は、毫も増加する所なし。而して地價は十九世紀間に於て少くとも三倍多きは十倍までも騰貴せり。然るに一ヘクタールの收穫高の増進せることは極めて僅かなり。其結果は即ち人口營養最重要品たるライ麥は、既に千八百五十二年以來輸出額より輸入額の遙に超過せざるを得ざるに至れり。其他少麥大麥ワート麥に就ては七十年代の始めより以來常に輸入超過あるのみ。即ち他穀類を除て以上の重要穀類に就て之れを見れば、其輸入超過は早く既に國際穀物大競争以前に

起れるものなり。換言すれば穀物の價の最も高く、人口數今日に比し四分の一以上少なくなりし其の當時に於て獨逸の農業は早く既に國內の重要を満すの能力なかりしなり。

さればこそ此人口を養ひ得んが爲には獨逸國は工業製品を生産して之を外國に送り、換へて必要な食料品を輸入し、之れによりて以上示せし如き迅速なる人口の増殖を支持へ得可き餘剰の利潤を得未だ會て有らざる國富の増進を輒からしめ得たるなり。

此く明斷し來れば人必ず謂はん、愛國の士誰か如此發達を見て喜ばざるものあらんやと。奚ぞ知らん此發達こそ即ちオルテンベルグ、ワグナーの徒をして痛憂慷慨に堪へざらしめ、此發達にして若し今後持續するあらば獨逸國の將來は危殆に瀕するものなりと憂慮せしむるものならんとは。此發達の狀勢を見ればこそ、彼等は獨逸國を主として農業國たりし昔時に復歸せしむ可き經濟政策を唱道するに至りたるなれ。

第三章

次に考ふ可きは、我邦が其工業の發達を持續するとせば、其正に伴隨して來る可き危険は、如何なるものなる可きやの問題これなり。

元より工業の發達は、二三の危険を伴隨條件として持來ること之れあり。先づ第一には近世的工業經營が、勞働者の生命と健康に不利なる結果を來すこと之れなり。然りと雖も其起るを防ぐに足る豫防方法、並に一度起れる處に就て之れを除去する治療方法は之れなきにあらず。勞働保護法律並に勞働聯結の自由の如き即ち之れなり。此二者を完全に行ふて遺憾を止めざるに至らば、工業に従事する人民の地位は農民の其れよりも遙に善良なるに至る可きは明なり。

第二の弊害と見る可きは、工業地方に多數の勞働者の蟄集するが爲に住居の欠乏を惹起すること之なり。住居の欠乏は、幾多の經濟上、衛生上、道德上の惡弊を誘致するものにして、之に對する療法は住居改良なり。然れども今日住居改良の最も急を要するは、舊に都會の地のみならず、地方にあつても均しきものありて、工業地方に特有の現象にあらず。然れども以上掲げたる如きは、反對論者の工業に伴隨する弊害として唱道するものなり。

中、抑も枝葉とするところのものなり。其最も重要なるものとして主張せらるゝは我邦工業の進歩するに従ひ、益々外國に倚頼するの不得已に到らんこと即ち之れなり。此れに依て獨逸國經濟の狀態は、全く不確實なるに至る可しと云ふにあり。何となれば、諸外國が吾人に其農産物を適當且つ餘りに不廉ならざる價にて賣渡す可きや否や、又之れに代へて吾人より其工業品を相當の利潤を生ず可き價にて買取るを得可きや否やは頗る疑しければなりと云ふ。

されど獨逸國が其外國貿易を發達するによりて外國に倚頼從屬せざる可からざるに至る可しとの考は、今日或人士間に行はるゝ最不合理の妄想のひと云はざる可からず。從屬倚頼といふ語は、吾人が其必要を不可缺貨物を得るの國唯一ヶ國なる場合に始めて用ひ得可し。如此場合には、なる程此唯一の對手國は吾人に商品を買渡すを拒むか、或は之れを諾するも猶吾人の堪へ得ざる條件を以てすることもあらん。然れども如此ことのあり得る商品は、今日實際上も現存することなし。

其他の場合に於ては、國際間の通商關係は、外國をして我國に倚頼せしむること、我國の外國に倚頼すると同じかる可く從屬倚頼の關係は必竟するに相互的なり。外國は吾人に賣付け又吾人より買取る處なかる可からず。而して吾人に賣らんとする物品を有する以上は又吾人より買取る處なかる可からず。而して吾人にして其の生産を、最大の餘剩ある産業に集中すればする程、吾人の國際交換より贏得るところの利益は大なり。何となれば、吾人が換へて外國に與ふ可き商品を廉價に生産するは、外國より之れに對して受取る商品の廉價なると理均しければなり。

然れ共人或は答へて云はん、露國を見よ、數年前ライ麥輸出禁止の令を發したるにあらずや。此の一例は吾人が其の需要する穀物を自ら生産せざるとも、猶常に其の必要とする處のものを、吾人に供す可き外國ありと云ふ論を最も明白に反駁する事例にあらずや。夫れ然り豈夫れ然らんや、此の事例こそ却て論者の唱ふる所を反駁する證左なり。何を以て云ふ、露國は主として農業國なればこそ、一度凶作の來るや、其缺く處の穀物を得んが爲に、換へて輸出す可きものを何も有せざりしなり。其結果は恐る可き飢饉を見た。然るに此間吾人は露國の供給を拒みたるライ麥を、吾人の製出せる工業品に換へて、

他國より購入するを得たるにあらざるか。

論者果して中古に於けるが如く、又は近年露國に於けるが如く、我邦を驅て何時も凶作に際しては、直ちに飢饉に瀕せしめんと欲するなるか。

吾人に反對するもの、更に論じて云はん。

我邦が今依て以て其工業品に代へて、穀物の供給を得る所の諸國も、其人口増加して其農業生産物を内國人口の食料に用ひて餘剰なきに至らば、亦吾人に穀物を供給する能はざるに至らん。其時吾人は餓死するの外なけん。

此反對説は同反對説中の他の論點、即ち外國の豐饒なる土地の漸次小麥の耕作に移るに至らば、中央歐洲に於ける小麥の價、一噸に付五十九麻克迄下落するに至らんとする論と、正に正面的に撞着す。此二個の憂慮は相矛盾し、一他を排して正しきもの何れか一ならざる可からず。吾が反對論者は、其の反對の理由を以上の内何れかの一點に定むるを要す。翻て事物の實狀如何と問はゞ、即ち左の如し。

我邦に小麥を輸入する諸國に於ては、勞働者不足の爲め其の土地の大部分は極めて不

完全に耕作されあるのみにして、其人口の増殖は益々増加する輸出に充つるを得べき餘剰を生ずるの外なけんのみ。將來小麥を輸出するに到る可き世界の大部分は、未だ漸く開始の緒に就きたるのみ。ドクトルケルゲルの報告によれば、アルジェンチン國は猶此上五千五百二十萬噸の小麥と、八千七百萬噸の玉蜀黍を産することは、極めて容易なりと云ふ。以前は乾燥なる氣候の故を以て、耕作には不適當なりと信ぜられたる濠洲は、千八百九十九年に於て、我邦に一四〇三五、八噸の小麥を輸出せり。更らに又た亞非利加の吾人に供給し得可き處は、若し一度耕作の開かるゝことあらんか、實に巨大なるものあらん。而してメソポタミヤに於て耕作再始の結果非常なる生産あらん事は、今日農業界の大なる杞憂を抱く所にあらずや。

最後に反對論者の最重要とする論點を檢せんか。彼等は曰く、今日吾人に穀物を送る諸國は、果して何時までも其供給する穀物に換へて、我工業品を得るに満足す可きや否や。北米合衆國既に然らず露國又同じ、アルジェンチンすらも既に自國工業の發達に銳意せるにあらずやと。

今如此反對論には、二様の解を下すを得可し。其一は、吾人が従來工業品を供給し來りし國々に於て漸次工業發生し、遂には漸次獨逸工業品の或一部を要せざるに至らんこと之れなり。如此時期の來らんことは疑を容るゝ余地なし。然れどもこれは單に獨逸國民經濟に取りては其工業的生産内に於ける轉移を意味するに過ぎず。此くの如き轉移が生産者の一部分に困難を與ふ可きは明白なり。然れどもこれと同時に他方には生産者の他部分が之れによりて得る利益の存することを忘る可からず。吾人にして充分機に應ずるの準備あらしめ、我が生産力を時の必要に應じて、此等諸外國の工業より優りたる部分の工業に集中するを得んか、我國民經濟は全體としては、此轉移に依て毫も損する處なからんのみ。諸外國にして苟も其農産物を販賣するに意あらんか、彼等は我工業品の或物を購求せず、之れを自國にて生産し得るに至らば、彼等は我邦の彼等に勝れたる工業の産品を多量に購買するの餘力を生ずるの外なからんのみ。其二の解は我邦に農産物を供給する此等諸國が、遂には凡ての工業に於いて吾人より勝るゝに至り、凡ての工業品は之れを我邦に於けるより廉價に生産するに至る可しとすることこれなり。

右第二の場合の如きは實際上殆んど想像し得られざる所なり。唯茲に考ふ可きは、吾人が多くの場合に於て此等諸國に勝りて有する長所も、一の不利益なる事情の爲めに、殆んど滅殺せられんとすること之れなり、即ち我邦の中産階級保護政策之れなり。此政策は我が近世の生産組織に適合せる新中産階級を作るの力なく、却て將に廢れんとする舊生産組織に適合せる中産階級を人為的に維持したために凡ての産業の生産費を高價ならしむるの作用を有するに過ぎざればなり。

殊に國際競争場裡に於ける我邦の優勢を滅殺するものは、我國の穀價の他國に比して高値なることこれなり。吾人と共に國際競争場裡に中原の鹿を争ふ可き諸新開國は、我邦の如く其競争力を大に滅殺する中産階級政策の病弊を有せず、又其生産する穀物も遙に廉價なり。

今假りに想像して、今日我國に小麦を輸入する諸國が、凡ての工業品製造に於て吾人に勝るゝ場合ありとするも、トレンス並にリカルドの明解せる如く、此等の諸國は我邦より工業品を輸入することを決して廢せざる可し。何となれば、此等の國にては其優勢の最

も、大なる種類の工業生産に其餘力を集中するを以て、策の得たるものとなせばなり。此等の國は假令凡ての工業品を吾人よりも廉價には産し得るとするも、猶其最大の利潤を生ず可き工業製作に従事し、其製品に代へて自ら製し得るものゝ中、或物を吾人より買入れんか、此等の買入品は自ら生産するよりも、彼等に取りては猶一層遙に廉價に附く可ければなり。吾人も亦た此の場合に於て、如此國際的交換によりて、外國輸入品を内國にて製造するよりも、多くの利益を承く可きなり。然れ共此利益たる吾貿易對手國の承くる所のものよりは、少額なる可し。何となれば、吾人の受くるものに比しては、之れに代へて彼に與ふるものゝ値多からざる可からざるは、理の當然なればなり。此事實に鑑みて我邦が將來如此地位に立つを憂慮する人士こそ、却てかの中産階級政策殊に穀物輸入税に對し正に反抗すべき義務あるを痛感せしむ可きものに非ずして何ぞや。何となれば、此中産階級政策並に穀税によりてこそ、實に我工業品の生産費は高められ、其結果は國際貿易場裡に於て、吾人の受くる所は、吾人の與ふる所の勞役資本の値よりも多からざる可からずて、ふ不利を招くに至る可ければなり。

「されど此種の經濟上の思索に習はざる人々が、此容易に學理を會得し能はざるありとも、決して憂慮するに及ばず、猶他に吾邦の工業品輸出が、全然杜絶する日來らんとを憂慮するに及ばざる理由二あり。其一は文明國に於ける工業製品に對する需要は、現今既に増大しつゝありて、生産額の増加は容易に及ばざるものある事此なり。其二は、此く大なる需要も世界の半開諸國の開化し行くに従ひ、將來起り來る可き需要に比するときは、誠に九牛の一毛にも若かざる感あること是れなり。今日主として機械を使用する國は大英國なり、獨逸なり、合衆國なり、佛國なり、白耳義國なり、和蘭なり、此等諸國の工業品の輸出に比する時は、世界の他諸國の輸出は未だ算するに足らず。然るに、此等諸國の人口總數は、漸く二億二千萬に充たず、而して世界全人口數は實に約十五億と算せらるゝに非ずや。されば約十二億の人口の需要は、漸く其發達の端緒にありと云ふ可きなり。其消費高の少なきこと、而して其消費高の大に増進し得るの見込あることは、此等半開國の鐵の消費高を文明諸國に比するときは、直ちに領得し得らる可し。鐵類の第一消費者は、交通機關なり、鐵類の消費高少なきは、交通の發達せざるの證にして、其多きは交通の大に發達せる

の左券となすを得可きなり。而して鐵類を消費する交通機關の發達は即ち同時に他の欲望従て各般の産業の發達を測量するの尺度となすを得可きなり。今此の鐵の消費高を尺度として比較せんに、現今此十二億の人口は一人に付僅かに十一乃至十二封度の鐵を消費するに過ぎず、然るに大英國佛國獨逸等にては、千八百八十九年には一人に付百七十五封度、合衆國にては三百封度に及びり。其以後合衆國にては三百五十封度に上進せり、其四百封度に達するは遠きことにはあらざる可く、又前記歐洲諸國にても假令これ程ならずとも鐵の消費高は益々上進の一方あるのみ。

此十二億の人口の住居する國々の海岸に汽船の集る程其國內に鐵道の布設せらるゝ程其人民の欲望需要は増進し鐵道線路工事用器具機械の消費高の増加に伴ひ生産力も消費力も共に著しく増加すべし。

如此吾人は今蒸汽船鐵道によりて、地球の大部分の大に開發せらる可き發途に立つなり。消費する鐵の一噸は夫れだけの又他の目的に要する鐵の需要を増し、此くして亞細亞、亞非利加、南中亞米利加、濠洲の人民に其増進する需要を充すこと益々容易ならしむ、此

十二億萬以上の人口の購買力の増進は、即ち二億二千萬に充たざる今日の文明の先鋒に立てる諸國民の生産業に對する製品の需要を益々増進するの結果を生ずるの外なく、更に其結果は現今以上の多數の人口を、此等の國々に於て養ふの力を備へしむ可きなり。

然れども茲に若し十二億以上の人間が其増進せる欲望を充たさんが爲め、凡ての需要品を自ら生産するに至らば如何、吾人は克く此賃銀安き勞働と競争し得て餘ある可きや否や、答へて曰く、然り確かに然り。蓋し歐人の觀察者の唱へ、鑑識ある日本人自ら之れに和するが如く、一人の歐洲勞働者の爲す處は、三人若しくは四人の日本勞働者の爲す處に匹敵するとせば、所謂『黄色の恐怖』即ち日本人の安き賃銀は少しも吾人を恐れしむるに足らざればなり。

然り而して日本人の生産力増進せんか、即ち其勞銀は又騰貴せざる能はず。此くの如くにして勞働の價の比例は歐洲にても、日本人にても毫も異同あることなし。今日經濟上進歩せる國々の勞銀高きの故を以て其將來に關し杞憂を抱く人々は眼を放て合衆國を見るを要す。合衆國の勞銀は歐洲何れの國に於るよりも甚だ高し。然るに歐洲何れ

の國に於ても、米國に於ける程一製品の生産に要する勞働費少なき處は之れなし。若しも勞銀の高が勞働費の額を定むるものならば、北米合衆國より世界何れの港に向ても輸出し得可き商品は存せざる可き譯なり。然るに實際果して如何、米國より低き勞銀を支拂ふ諸國こそ、今日最も米國の競争を恐るゝにあらすや。本集第五集所收 勞働經濟論參考

此十二億以上の人口の生産力の増加は、二億二千萬の人口の損を招かざるのみならず、却て彌々其利益たる可きのみ。何となれば、二億二千萬の人民は其自ら生産せるものに對し、十二億の人民より換へて得る所の商品の額、其生産の増加によりて多きを加ふ可ければなり。國際間の貿易は主として商品と商品との交換に存し、貨幣を交換するは極めて少額の差額の支拂にのみ充用せらるゝものなるは茲に絮説を要せず、吾人自ら世界各國の産する處を買入れ、之を消費するに少しも制限を設くる事なくんば、吾人の彼に賣る處、又從て多かる可きにあらすや。吾人が外國産品に對して國內の販賣市場を開放するは、即ち又同時に彼國內に於て、吾が輸出品に對する市場を擴張する所以にあらすや。吾人が亞細亞、並非利加、南中亞米利加諸國の産品を我國内に許容するによりて其の購買

力消費力を發達せしむるは、同時に彼等が我製品に對する需要を増進し爲めに二億二千萬人の有する反射爐、工場細工場が、此の需要を充たすに、日も維れ足らざるに至る所以にはあらざるか。

反對論者之れに答へて曰ん、如此んば即ち徒らに販賣市場を争奪せんが爲め、各國民間に放縱的の政策、衝突、紛争を起さしむる所以なりと。夫れ然り豈夫れ然らんや。蓋し吾人の對手國たる諸國並に我競争者たるに至る可き諸國の中には、猶未だ新開市場に於て平和的に競争するを以て、各己の利益に最も善く合する所以なりとの悟りは行渡り居らず、現今の形勢を以て之れを見れば、各國民は猶未だ凡ての望みを暴力に繋ぐの域を脱し居らざればなり。されば論者の憂ふる如き衝突は、決して必然不得已ものにあらすとも、猶必ず有る可けん。今假りに如此は我國民生存上、必然不得已に伴隨條件と假定するも、今日主たる農業國へ復化せよと主張する人々こそ、此事情あるが爲めに、獨逸國民の膨脹政策に反對するの理由となす最後の人々なる可けれと、余は思ひたりしなり。時機の熟せるに際して、政治上の統一を欠きたるが爲め、一世紀の永き我獨逸國民は世界の分配に

當り最も損を被りたることを慨き居たるにあらずや。此理由よりしてこそ獨逸帝國の建設を最赤心を以て歡迎したるは實に此等の反對論者にあらずや。而して此獨逸帝國が世界政策を遂行し其經濟上の利益を世界の各部面洋の東西に擴張し得んが爲めに此新帝國の強力なる海軍を有す可きことを最も熱心に主張せるは此等の人士にあらずや。「我獨逸國民は神を恐る、其餘恐るゝ所一もなし」とは我等が彼徒の口より屢々聞きし所にあらずや。

然るに世界政策を斷行し、如此永く翹望したる國力の擴張に資す可き好機會の到達せる今の時に及んで、吾人は吾人が之れより除外せられ居れるを永く憤慨せる所のものを、他の國民に放委し去り、小心翼翼遂には其人口増殖をも禁遏せざる可からざるか。人口増殖は吾人を驅て、日に益々工業國たらしめ、從て世界經濟に侵染すること愈々深からしむ結果最も重き最も悲酸なる道德上人道上社會上の結果を來す衝突、或は起らんことを恐るゝの餘り、小心翼翼此人口の増殖をも斷念す可しとするものなりや。然り而して如此慷慨論が彼の唯だ土地所有階級をして従來の社會との地位を失はざらしめん

が爲には内國勞働者を逆境に沈淪せしむ可き最も重大なる最も悲酸なる倫理上、人道上、社會上の結果をも、敢て辭せざらんとする人々によりて主張せられんとは。

最後に工業國の恐怖として數へらるゝものは其食料品の全部を擧げて獨逸領土内に於て生産せざるときは、吾人は戰時に方り餓死するの外なかる可しと言ふことこれなり。此議論は思ふに農業國論者の論點中最も薄弱なるものなり。何となれば若し獨逸國にして、主として農業國ならんか、其時こそ却て今日の軍事上の状態にては戰争の一度起るに方り、餓死の危険最も多かる可きなれ。予は一ヶ年間持續する戰争の例を取らん、元より予は歐洲の天地にては、向後の大戰争は決して一ヶ年持續することはなかるべしと信ず、何となれば何れの國民も今日如此長戰の費用を負ふに堪へざればなり。然れども餓死の恐れあるは少くとも一ヶ年以上持續する戰争の場合ならざる可からず。何となれば之れより短き期間の戰争中全國民を養ふに足る可き穀物を平時國內に備へ置かずとなれば、吾政治家、外交官、軍人は正に絞罪に處して可なるべければなり。乃ち少くとも一ヶ年持續する戰争ありと假定し、而して又獨逸國は穀物の需要を悉く

國內の生産を以て充し得と假定せんか、此場合にありては何處より田畑を耕し、收穫を取入る可き人間を得來る可きか、一ヶ年繼續する戰爭にして假定する如く、四面皆敵に包圍せられたるときは、必ず現法律により兵役の義務ある壯丁、即ち其數凡そ千二十萬人は皆召集せらるゝに至らんや必せり。

然らば何處に國內の田畑を耕し、我全需要類の穀物の生産に従事す可き人間を求めん、壯丁は悉く出で、軍役にあり、残るところの者は身體虚弱の者、婦女、老幼者のみならん、タキトスの報ずるところによれば古獨逸民族の耕作は、此等の幼老、婦女のみの従事する處なりしと云ふ。然れども今日五千六百三十萬の人口に向ては、如此耕作法は手もなく餓死と同意義なるの外なしのみならんや、戰時に方り必要なる穀物の輸入を保證するの必要は我海軍擴張を主張せる理由にてはあらざりしか。

次に考ふ可きは、吾人が主張せし獨逸國の工業進歩し、更に新販賣市場を得るに汲々たるの結果として、免る可からざる國際的の紛争に堪へ得て餘ありとの所説と、獨逸國の軍備力との關係如何之れなり。

抑も一國の軍備力は、二個の之れを支配するものあり、其一是即ち兵役に堪へ得る壯丁が必要の數だけ存在すること、其二是此軍隊を養ひ之れが甲裝を爲すの資あること之れなり。而して兵役に堪ゆる壯丁の數は、又二個の原因によりて支配さる、即ち獨逸國が養ひ得る人口總數の多少と、此總數中に於ける兵役に堪ゆる壯丁の比例數これなり。此二個の原因綜合してこそ獨逸國が戰場に送り出し得る兵卒の數の多少は、定めらるゝものにして、單に其一のみにて定めらるゝものにあらず。

然り而して人口總數に對する徵兵合格者の數の比例は、現在研究材料の不完全なるが爲めに、最後の斷論を下すこと能はず、シユモラー年報に於けるビンデワルド氏の最近論文も其研究の範圍の不完全なること、其の模範としてとるに足らざることは、其反對の論結を生ず可き、昔日のバベリア國の範圍に均しきが故に、此問題の解決に寸毫も近づく事なし。反之ウルテンベルヒ年報千九百年第二冊第一、九十七頁以下に公にせられたる、衛生監督官ドルトル・エルベンのウルテンベルヒ國に於ける徵兵合格者の統計は、大に注意の値あるものなり。此研究の結果は、從來世人が農業地方は工業地方よりも比較的多數

の合格者を出すと信ぜるは其當を得ざるものなること。而して人民の産業の或は主として農業的、或は主として工業的性質を帯ぶるの差違が、二國各地方に於ける合格者數比例には何等の影響をも及ぼさざることを證明せり。

此結論にして果して正當なりとせんか、予が『現今獨國軍備の基礎』ストットガルト千九百年第三十二頁中に比較的合格者の農業地方に多き事を認識したるも、亦從て訂正を要す事となる可きなり。然れ共此農業地方に合格者の比例多しとの説が、普國陸軍省の公約せる調査の公にせらるゝの日新なる確證を得るとありとするも、主として農業を營む國と、主として工業を營む國とは其何れが多數の兵卒を供給し得可きやの問題は、工業即ち然りと答ふるの外なし。何となれば、一國の養ひ得る人口の總數多ければ多き程、其多數の人口がたとへ比較的合格者數は少くとも絶對的の總數に於いては多數の兵丁を供し、從て其國の防禦力はそれ丈強きことは明白なる理なり。何となれば戦時にありて輸贏を決する所以のものは、他の事情均一なりとするときは、兵丁の比較的の數にあらすして、絶對的の數なればなり。然るに工業地方は農業地方より遙に多數の兵丁を供給す何となれば工業は

一定の土地に遙に多數の人口を養ふを得ること、到底農業地の比にあらず。從て常に農業地よりは人口稠密なればなり。

さればこそ、工業國の戦場に送り得る軍隊の數は、農業國のそれよりも大なるを得る譯なれ。

然れども論者の要求する農業國への復古が我國の財政並に平時と戦時に於て、我陸海軍を維持するの能力に、如何なる影響を及ぼす可きや。

反對論者は予輩に答へて、獨逸の農業は高き關稅によりて再び之れに堪ゆるの力を得、租稅の主たる部分を負擔するの地位に復歸す可しと云はんと欲するなるか。

よし、さらば予は今茲に他人の所得より補助を受くることなくしては、生存し能はずと主張する所の人々が、農業國復古の後、農業が重要産業たるの故を以て、當然之れに伴隨する義務即ち租稅の主たる負擔を荷はしめんとするものなりと推定せん。此推定は誠に早計速断なれども、假りに數歩を譲りて、此くなるものと假定するも、猶如何なる初學者と雖も、納稅者と租稅負擔者との區別は、之れを知らん然のみならず、又少しく思慮を費す人

々は直ちに知らん農民の租税負擔力が、人爲的に其産品を高値にする輸入關税に基くものなるを思へば、農民の仕拂ふ所の租税は要するに如此高値にせられたる穀物を購ふ人々の懐より出づることを解するに苦しまざらん。

此點にこそ穀物輸入關税増加の國家經濟上、最も憂慮す可き方面は潜伏するなれ。

今茲に論者の要求する農業國への復古の、財政上の結果を更に少しく明瞭ならしめんか。

論者主張して曰く、獨逸の農業は他の産業の純收入より補助を受くるにあらざれば、其業自らには純收入なるものは最早存せずと、一國民の生存に要するに偉大なる凡ての事蹟、即ち軍備内治司法教育經濟保護等の之れに對する相當の犠牲を要する如く、此純益なき農業に純收入を得せしめんが爲には、國民は敢て犠牲を辭せざる覺悟なかる可からず。從て他の産業は之れが爲に關税の額丈は、年々農業に數億萬麻克の救助費を支拂ふ義務ありと。然るに今此の農業が此救助あるによりて、始めて納税能力を得るならば、結局此税額を負擔するものは農業にあらざして、此犠牲を供する産業、換言すれば此納税に充

可き純益を有する他の産業なる可きは争ふ可からざるの理なり。

然れ共如何にして此産業は第一從前通り自己に振りかゝる租税を負擔し、之れに加へて、第二農業の能力其租税負擔力を生ずるに要する補助金を與へ、第三、加之一般の經濟政策が論者の要求するが如く、外國貿易を再元の自然的の立場に引き戻し、國內の分業を起し、都會工業勞働者は其工業製品を絶へず地方農民のみに賣るによりて生活し得るを得せしむる主動者となるに至る可き様の方針を取るときは、農業以外自餘の産業は、如何にして此等の諸重荷を負ふことを得可きや。事物の自然に反對する矛盾も、此に至りて極まれりと云ふの外なし。

農業は如此すれば、勿論再び重要なる産業となる可し。然れどもそれは自己の力を以て工業以上に進歩せるの結果にはあらずして、商工業を毀害して而して穫る所の結果ならんのみ。然り而して農業が補助を受くるを得るは、商工業に純益あるが爲めにして、而して此く商工業の損害せらるゝに至らば、從てこれによりて救助せらるゝ農業も、亦其人爲的の繁榮を失ふに至らんや知る可きのみならず、其の財政上の惡果も亦直ちに顯はるゝ

に至る可し。然のみならず、如此經濟政策の結果は平時にてすらも、彼の多額なる軍事豫算を供給し能はざるに至らしむ可し。何となれば獨逸國民の年々の所得額は、最早之に堪ゆる能はざるに至る可ければなり。其戰時に於ける果して如何、一度商工業萎微し、取引所荒廢せる曉には、獨逸帝國並に其同盟國が軍事公債を募らんとするも、何處の金融市場が之に應ずるの力あるものを殘す可けんや。此く論じ來れば、獨逸の農業にして飽くまでも其能力を保持するが爲めに、年々數億萬麻克の補助を要するとせば、關稅によりて穀物を高直ならしめるによりて、此額を得るよりも、寧ろ直接に此額を支出すること、我獨逸帝國の財政上軍事上の利益を害すると、却つて少なきを得るの理了解するに難からざる可し。元より此場合にも、商工業は其膏血を絞られ、此數億萬麻克を支出せざる可からざるに至ては、軒輊する所なかる可しと雖も、穀物關稅を引上ぐるよりも、苦痛を減ずること、遂に僅少にして止まん。何となれば、商工業は其販路を害せらるゝと、關稅引上の場合の如くならず、外國に販路を求むるにもせよ、亦内國の勞働者に其製品を販賣するにもせよ、何れにありても、關稅引上げの場合程は、害を蒙らざる可ければなり、需要を減少し、勞

働者の購買力を少なくするによりて、工業品の内國販賣高を大に縮少す可きは、理の見易き處なればなり。而して又如此直接に農業に救助を加ふる時は、天下の最愚者と雖も、猶克く如此の農業保護政策の全く貧民救助と同一種類のものたるを看破し得て、獨逸國が再び主として農業國たる舊時に復歸すべしとの要求を免ることを得ん。而も此財政と國民經濟上の思考は、反對論者に取りては、此復古的政策に比しては、遂に其下に立つが故に、彼等は此復古を目して、凡てに勝りて其の關稅引上げ論の根據とはなすなり。茲に於てか論者の要求する農業國への復古は、毫も農業の繁榮を招くことなくして、却て偶々商工業の萎微を齎すあらんのみ。如此要求を目して帝國の軍備の基礎をすら犠牲に供せんとする、破壊的の憎惡政策なりと云ふも、人誰か誣たりと爲すを得んや。

第四章

既に以上屢々論議せるに、更に蛇足を加ふの必要ありや、獨逸國を人爲的に農業立國の

舊時に復古せしむ可しとの要求に向て、猶喋々の辯を費し之に對して論戰の鋒を鋭くするの必要ありや。反對論者も予も共に均しく、論争の根據となすものは、人口の年々著大に増殖するの一事なりとす。然るに我邦にして、主として農業に従事するの國ならしめんか、如此人口の増殖は或は絶無なるか或はたとへ増加するにしても、從來の速度を以ては進むこと能はざるは明瞭なり。我邦人口の増加今後猶毎年約百分の一の割合を以て持續するときは、彼の生産遞減の大則は、我全人口の合理的生活に必要な食料を、獨逸の國土の上のみにて生産するを許さず。加之主として農業によりて國是を定むるときは、我國民の將來に必要な不可缺政治上軍備上の優勢を維持し、之れを鞏固ならしめんが爲めに、必要な経費を支出するの道は杜絶するの外なし。反之我國にして主として工業を以て其立國の礎となすときは、此等凡ての必要に應ずるに足るの道を得ることは、反對論者の又認許するところなり。彼等が獨逸國民は近き將來に於て、其工業製品を外國産穀類に換へて、輸出販賣し能はざるに至らんと、の杞憂は毫も根據なきものなること、予之を明示し盡せり。於茲乎此論争は既に已に終結を告げたるものと看做さざる可からず。

然れ共猶茲に數言を加へざる可からざるは、反對論者が此農業立國の舊態へ、人爲的に復古せしむるが爲に取らんとする方法、即ち之れなり。

反對論者の取らんとする此等方法手段が、其正に想像する人口増殖の上に及ぼす作用程最も明白に彼等が厥起して正に攻撃せんとする國家政策の非社會的傾向を曝露するものはあらず。

今之れを明かにせんが爲め、反對論者の據て以て其農業的復古を主張する根據となすところの主要の論點即ち地球が將來全然工業國に化し去らんと、の杞憂を再考せん。

今正に終りを告げたる舊世紀の科學上の最大偉業は、所謂エネルギー保存の大則の發見これなり。此大則に従へば、宇宙に存在するエネルギーが消滅するが如く見ゆる諸現象は、管に動的エネルギー（動勢力）の靜的エネルギーに變じ、又は可見性エネルギーの熱に變ずるか或は其反對なるかに存するに外ならず。にも拘らず、物理學者は更に教へて曰く、地球は不絶其終局に向つて進行す、力を熱に變ぜしむるは容易なれども、熱の全量を再び力に回歸せしむるの法はまだ存するとなし。其結果即ち宇宙のエネルギーは、日に

熱に變じ去り、此勢の持續するときは、宇宙は遂に同温度の熱の一塊と化し去る可く、更に新しき動作を起す力なきに至らん。何となれば力は温度の差違の存するを必要條件とし、其存せずして凡ての物同一温度に歸するときは、生物は最早生存する所以を失ふに至る可ければなりと。

物理學者が教ゆる此の豫測は誠に喜しからざるものと言はざるを得ず、然れども吾人は之れを知りて猶食ひ猶飲み或は自らを洗ひ、衣類其他の日用具を滌ぎ、其之れが爲めに可見性動勢力が熱に化し去り、其熱は飛散し去て復還らざるものなるを思はざる如くなるにあらずや。吾人は又不絶機械を運轉し、之れが爲めに其運動のみならず一度動かしたる機械が靜止するは、即ち熱を發生し、其熱は再び力に回歸すること能はざるに關心せざるが如くなるにあらずや。

然り而して凡ての運動は熱に變じ、其熱は一部分のみ取返し得るに過ぎず、他の部分は飛散し去て復還らざるは、即ち日に益々地球が其末期に近く所以にあらずして何ぞや。然れ共予は此の未來の世界滅落を遷延せしめんが爲に諸動作の靜止、換言すれば現在

に於ける死を主張せる物理學者あるを未だ嘗て聞きしことなし。而も物理學者にして予の反對論者と同一論法に出でしめんか、彼等は即ち將來の世界滅亡を防がんが爲、現在に於て直ちに諸運動を停止すべしと主張せざる可からざるなり。何となれば予の反對論者は獨逸國民をして他國民に殺害せらるゝの危険を免れしめんが爲に、直ちに自殺せよと勸告するに外ならざればなり。

何を以て言ふ。

獨逸國が工業を以て立國の基礎となすときは、其人口は從來の形勢を持續し同一の割合を以て増殖するも、猶之れを養ふ可き食料を供して餘あるを得ることは彼等の認識する所然るに彼等は謂らく、地球上の他國民亦自ら其需要する工業製品を悉く生産し得るに到るの日來らん、其時は彼等は其農産物を我工業製品に換へて吾人に與へざるに至らん。然るに其時に至りては、獨逸國民は最早非常に増殖し了て、國內の土地は如何にするも之れを養ふ能はざる悲境に沈淪するの外道なげん。若かず今に方て正に百年の計を立て、農業を以て國本とするの舊態に復古するにはと。元より我邦が農業を以て國是と

するときは、全人口を養ふ可き食料を得るの困難は日に益々甚しからんことは前段に説明せる所によりて疑を挾むの餘地なし。即ち後來全地球諸國の悉く工業國となるに到るを待たずして、生存の道愈々困難を極め、從て彼のマルサスの所説の如く、我邦人口の増殖の速度は、之れが爲に大に緩漫となるの外なし。

今論者の要旨を換言すれば、將來悲境に陥るは恐る可し、故に今の時に方て須く我國民を難局に瀕せしめ置く可しと云ふにあり。焉んぞ知らん、反對論者の人口増殖を杞憂する常に必ずしも如此ならざりしを證するものあるを。千九百年一月二十七日には、猶アドルフワグナーは、柏林大學の講堂に於ける『領域國家より世界強國』なる講演に於ては、獨逸國民の可驚人口増加を稱して、我普魯亞國、我獨逸帝國が十九世紀に於ける大進歩の兆候なり原因なりと云ひ、之を喜び之れを樂しむが如き言辭を發せり。而して此時には、氏は未だ農業立國の復古に關しては、片言隻語の以て及べるなし、あらず、氏は却て其反對を揚言せり、元より言、工業的發達の最極度に及べるものなきにあらざりしと雖も、其之れを結ぶの語に曰く、

然れ共現在并に近き將來に向ては、我經濟上の状態、如此趨勢に向て進歩するは、——元より我國の農業の利益上必要なる二三の制限を除て——我國民の猶姑くは現時の勢を以て、増殖するに必要の條件なり、即ち我邦の經濟及商業政策は此方針に基て打算せざる可からず、而して又此政策は我陸海軍の勢力擴張を得せしむるものなり

と。

此一句は或は、全論を打消すに足る可き漠然たる制限を含むと雖も、而も全文中一語の未だ急激なる工業的發展と、人口増殖の結果とに關する恐怖を啓示す可きものなし、あらず、ワグナーは却て曰く、我邦の發展は此の方針に向て勇往直進せざる可からずと。而して氏は科學的結論を下して曰く、吾人須く今の時に方りて、悲觀と翼々たるの細心とは之れを去りて可なりと。

然るにオルデンベルグ氏の福音主義社會黨の議會に於て、以上ワグナーが排斥したる悲觀的所論を發表せるや、氏も亦之れに贊和し、續て千九百年九月のロトゼ雜誌上に於て之れを自己の意見として亦公表するに至れり。加之氏は遂に獨逸帝國は農業立國の舊

態に復古せしめざる可からずとの農民黨の主張に唱和し、人口の著大なる増殖に對し、公々然之れに反對する言をなすに至れり。

茲に一の認許す可き事あり他あらず、人若し農業國是より工業立國へ轉移するを以て、一大不幸と做すとの見地を執らんか其當然の結果としては、人口の増殖こそ實に凡ての禍害の根源なりとなさざる可からざることは是なり。果して然らば、又此人口増加を根本的に停止せしむるか、又は其の増加の速度を著しく緩す可き方法を執るべしと主張するは議論の當然なる順序とは云ざる可からざることこれなり。

今此民衆の生存を困難ならしむるによつて、招致せらる可き人口増加の緩滞なるものは如何にして來るやと云ふに二個の道あり。曰く出生數の減少、曰く死亡數の増加之れなり。

出生數に關しては、ワグナーは主張して曰く、出生數は大體に於て著き異動あるものにあらずと、予は此見解は謬れりと信ず。然れ共如此信ずる論者に取ては、人口増加を制限する唯一の道は、死亡數の増加より來るの外なきこと明瞭なり、誠やワグナーは死亡數の

減少を目して、必ずしも常に喜ぶ可き現象にはあらずと爲す。蓋し死亡數の減少なるものは、多くは幼児死亡數の減少と、高齢者死亡數の減少とより來る。而して幼児老年者數の多きは、實に壯年生産階級の負擔を重くする所以にして、生産々業に従事する人民に過重の壓抑を加ふる所以なればなりと。

予は今茲に小兒死亡數の減少は、經濟上の浪費を大に節約する所以なること並に勞働資本の徒費を著しく輕減する所以なることを、説示するを快しとせざるものなり。何となれば、如此問題に關しては、經濟上の眼點は、遂に倫理上の思考の下位に立ち、是れに對しては、彼は擧げて言ふの價値なき程なればなり。

假りに今倫理上の見地に基き、經濟上の論點よりのみして之れを見んか、生産年齢に於ける壯年者の負擔を重加するものは、老年者の壽命延長のみ。然れども吾人は各種經濟上衛生上の進歩によりて、獨逸國民の壽命を延長するを得たるを見て、得意滿面なりしにあらずや。千八百七十六年に於て百分の四二・六一なりし出生數、千八百九十九年に追んで百分の三七・一一に減少したるに對し、其死亡數は猶遙に減少したり。即ち千八百七十

二年に百分の三〇・六二なりしもの千八百八十八年には百分の二一・七八千八百九十九年には百分の二二・六八に減少したり。

於茲知る可し最近數十年我國に於ける激甚なる人口の増加は出生數の増加之れが原因にあらずして死亡數の減少之を招致したるものなるを。されば人若し生活必需品を高直ならしむるによりて人口増加の速度を遅緩ならしめんと欲せば以上の進歩改善を再び罷廢するに存せんのみ。若し勞働者等が穀物關稅なるものは彼等を驅て早く墳墓に入らしむる所以のものなるを知らば彼等は如何にして此穀物關稅に向つて歡喜するを得可けんや。

嗚呼如此が吾人の目的とするところならんには何が故に吾人は千八百八十年代に於て老年並に衰廢者保險制度を創設せしや予の解する能はざる所なり。此れと同時に他方には此食料品關稅引上を主張する論者が其關稅増加より得る收入を以て寡婦並孤兒保險費に充つ可しとの議は之を了解し得て餘りあるなり。然れども反對論者吾人に誓て曰く予等と雖も此農業立國の舊態に復古するを得せしめんが爲めに取る可き手段の

不可言悲酸なるものあるは之れを知らざるにあらずと。然り此明言を中心より眞面目に敢てする反對論者は其事實卓越にして倫常を重ずる決して人後に落ちざる人々なり。然るにも拘らず彼等が其達す可き目的の爲めには此悲酸を忍ぶは不得止事なりと信ずるは偶彼等の標置せる目的なる者が如何に其智覺を眩まし健全なる情操を有せる人々も猶其の目的の爲めに誤まれて自ら制する所以を失するに到るかを示すに於て餘あるにあらずや。

反對論者が辯解の辭に曰く我等の尙ぶ所は人口の實質にして其の頭數にあらず人口の數に於ては我國は決して露國米國支那等と角逐する能はず而して支那の運命こそ——然れども支那が純然たる農業國なること忘る可からず！——克く人民の實質が徒らに多數なるに如何に勝るものあるかを明示し盡すにあらずや。

オ、實質！頭數にあらず實質を進善せしめんが爲めに頭數を減ぜよと彼等は言ふなり。

彼等又謂らく此の實質に於て勝れたる人口は農民即ち是れなり。此農民を維持し之

を高むるの道は成程悲酸なるものあらん。然れども他に施す可きの道なきを如奈せん、一國民は其凡ての偉績即ち司法行政軍備等に向つて犠牲を供するを辭せざるが如く、此殊特撰良の人口を維持せんが爲に、犠牲に供する所ある亦何の否む所や之れある可きたとへ其の犠牲なるものが其頭數を削除し去る所の苦難と窮乏とに存せりとも將亦如何かして之れを辭す可きならんやと。乃ち獨逸國民の將來は、食料の價を騰貴せしめて、人民窮困の結果、其小兒死亡數を増進せしめ、老年贅餘の人間を除き去るによりて、農業上の超凡的人間譯者曰超凡的人間とはエーチエの作を作ること存すとよ！最近の統計によれば、露國に亞で歐洲中人口増殖の最も多きは、實に我獨逸國なりとす、出生數一ケ年殆んど二百萬人口の自然的増加出生數より死亡數を控除せる數を指す統計上の術語、年々約八十萬、即ち英國又は伊國の二倍、奧國の三倍に當り、洪甸利國の四倍に相當す、其他國に至ては年々の出生超過の數十萬以上に出づるものなし。

而して獨逸の露國に勝る處は其人口増加が露國に於ける如く、非常なる死亡數で、犠牲によりて伴はれざること、並に其増加比例の遙に規則正しきことこれなり。

此れ則ち吾人の今日まで最も誇るに足るとなせし所蓋し出生數並に死亡數双方共に減少して、而して此著大なる人口増加あることは、當然の附隨條件たる國富の増殖註。上たる所得統計の示すが如く、此國富の増加は決して都市に限られたるにはあらず、普國にては千八百九十二年より千九百年間には、調定所得額都市にては百分の四二・一増加し、地方にては百分の二七・八増進せり、ザクセン國亦均しと共に目して、以て健全の兆候とし、我邦經濟上、政治上の將來の保障となせるところのものにば、あらざるなきか。

然れども我國の工業立國に轉移して行くを以て、一大禍害となす論者の見地よりすれば、如此喜は一場の空夢たりしに過ぎざるなり。

論者の説に従へば、我人口我國富増進の度少ければ、少き程、我邦の將來の安固なる所以さればこそ、彼等は獨逸帝國を主として、農業國なりし昔時に復古せしめんとこそは欲するなり。

予は此不幸の豫言者の、進化的工業發展の將に齎すべき未來を杞憂するを聞くごとくに、獨逸の國民的諧謔の稀有の産物に想ひ到らざるを得ず、『慧きエルザの話』即ち之なり。慧きエルザ將に嫁入せんとす、鞆たる者も亦其處にあり、彼は唯其嫁御寮の果して慧き

や否やを確かめんと待てり、父は言へり。然り彼女は甚だ慧くして頭腦の中に糸を携へりと。母は曰く彼女は目明かに耳聴くして、風の街路を走るを見、蠅の咳拂を聞くことを得と。犁なるハンスは、間もなく自ら之れを確む可き時機に遭遇せり。

一日母なる人麥酒を齎す可く、エルザを貯窖に遣せり、エルザ樽の前に座せり。其時彼女自ら子が生み、其子赤子を生むの後隣人並に其子其子孫が彼女の紡ぐ絲に對し、充分大麥を興へ、之れによりて渴を醫するに足る丈の麥酒を醸造し得可きや否やには、未だ考へ及ばざりき、時は猶彼「曠昔風俗敦厚の世」にして、マルサス一流の人口過増の恐怖を未だ知らざる良き樂しき頃なりき。されど彼女の樽前に座して四方八方を見廻すに方り、恰も頭上に泥工の取忘れ置きたる鏝を見たり、彼女は考らく若し已れとハンスとの間に一人の子生れ、其子成長し而して彼女は此兒を麥酒を齎す可く此貯窖に送らん時、此鏝は將に頭上に落來りて之を殺さんと。

於茲乎彼女は座して而して泣けり、將に振懸り來らんとする不幸を悲んで力限り泣き叫べり。

讀者は克く知らん、如何にして下婢が馳せ來り僕も來り、母も來り、父來り而してエルザ何故に泣叫ぶかと聞て、異口同音に云て曰く嗟、何たる慧きエルザよ！と而して衆諸共其處に座して聲高く泣き號べるを。

犁のハンス偶訪ね來り人不在らざるを怪みて貯窖に降り、此有様を見て謂らく「慧き如此は既に足れり最早家を成す何の妨あらんや」と遂にエルザを携へ行き之と結婚の式を擧げぬ。

然れ共讀者又皆知らん、ハンスはエルザを娶るによりて如何に大なる損を招きしかを、又如何に彼が鳥絲に鈴を付けてエルザの頸にかけ、之れを戸外に逐やり、エルザは街上に彷徨するに至れるかを。村の人々は鈴の音を聞きて誰も戸を開くものなし。かくて彼女は何處へも入ること能はずして、遂に村の外に走り出で行く處を知らずなりぬ。

今日迄何人か我獨逸國民に薄志弱行の非難を加へし人あらんや、よしや吾人は他人の愚なる忠告なるものに、耳を傾けしことは屢ありとも。

否々却て勇往直進は獨逸國民の長所なりき。不幸禍難に際しても堅く持して變ぜず、

少しも悪びれすることなく、常に運命に對抗し堅く勝利を信じ、如何なる試惑に逢ふも、必ず勝を奏す可きを確信し、而して凡ての艱難辛苦を通じて、遂に吾人に勝利を得せしめたるもの、亦實に此獨行自信の念なりしなり。

然るに今幾多の年月間翹望期待したる所のもの、到達し隣人が其永く輕蔑したるハンスを恐るゝ可く始めたるの時に迫んで隣人との競争を懼れ隣人が己等の將來を危ふせんものは此ハンスならんと憂慮するの其瞬間吾人は却て自ら隣人に對し、恐縮疑懼を懷きて干戈を布かざる可からざるか、吾人は我子孫其又子孫が如何に生活し、如何に他諸國民が我國民と同じく、麻を紡がず田を耕さずなり、從て我絲に換へて我粟する穀禾を興へざるに至らん日、如何にして可ならんかの思慮のみに日夜肝膽を碎くを以て能事となす可きなるか。

吾人は子孫が一片の麵麩をも得ざるに至る可きを恐れて、寧ろ今に方て兒孫を生ませず、若しくは其幼少の時に於て之れを殺し去り、其長じて饑餓に迫るを防ぎ、又生産年齢者の麵麩を長く奪掠せしめんざらんが爲めに、老者を壓死せしむ可きなるか。

反對論者が以上の事柄を、吾人に説き教ふる今日は如何なる時ぞ、吾同胞は國民自疑心の勇敢なる憤討者フイヒテを紀念せんが爲めに碑を建て、『以て後世子孫に彼の教へに從て利己心と戦ふ道義上の義務、殉國報君の念を記紳銘肝するの戒となさん』と企つるの年にあらずや。

誠や若し我獨逸國民にして、彼の反對論者の唱ふるが如き忠言に耳を傾けんか、吾國を嘲謔するを能事とする儕輩は、如何に勝利の喜を爲す可きぞ、我不俱戴天の仇敵等は欣喜雀躍せん。何となれば、反對論者の忠言程我敵國人等に偉大絶倫の勳を建つる所以のものはなかる可ければなり。

吾人をして望ましめよ、ハンスは之れを娶るに先て、エルザの頸に鈴を懸けんことを隣人のエルザを逐ひしが如く、我隣人も亦鈴を鳴らして來る者は必ずこれを拒まん然り如此せば稱して獨逸國民と名くる彼女は世界史上より消滅し去ること誠に速かなるを得ん、反對論者の忠言は即ち此獨逸國民を滅亡せしめよと云ふに外ならざれば。